

言葉にする力を育む高校事例

生徒たちが自分の内面と向き合うことで、「私だけの言葉」を見つけ出し、言語化する授業を教科や探究で実践している学校の取組を紹介します。

日本語科で
「私の言葉」を
探す

教員が生徒と徹底的に向き合い 「自分の言葉で自分を語る」力を追求

自由の森学園 中学校・高校（埼玉・私立）

学校データ

1985年創立／全日制課程普通科。「人間の自立と自由への教育を追求する深い知性・高い表現・等身大の体験」を教育理念に、点数序列主義に迎合しない独特の教育を進める。高校では100以上の選択講座を用意し、一人ひとりの生き方に結びつけていく学びの環境を提供している。

国語ではない「日本語」科で 自分の言葉を見つけていく

点数序列主義に迎合せず、一人ひとりのかけがえのない「個」を大切にすることを目指して設立された自由の森学園。1985年の創立当初から、暗記重視ではなく対話により考える授業を実施し、評価は点数ではなく教員の記述、学びの成果はテストではなく作品やレポートで表現する教育を実践している。

「本校で生徒に得てほしいのは点数ではなく、自分の立ち位置を見つけることです。学校とは、今自分はどこに立っていて、どこを目指していくかを探る場所というのが本校の考え方です」



写真左から、中学校教頭
日本語科・山口大貴先生、
日本語科・土方真知先生

（中学校教頭 日本語科・山口大貴先生）

生徒はすべての教科で徹底的に自分と向き合い、それを言葉にする学びを体験している。

「日本語」科は、その基礎を担う教科だ。

1991年以来、「国語」科とは呼ばず、国とは切り離して「自分たちの言葉」とし、さまざまな文章を通して自己を考える教科として「日本語」科と呼んでいる。教科目標は「自分の言葉で自分を語る～言葉による自己表現の追求」。市販の教科書や文科省の指導書に頼りきらず、授業を通して生徒が本質的に自分を問うように、教員チームで教材選びから授業の組み立てまで行っている。

「自分を語る」とは自分の考えを文章化していく作業だが、まずは文学作品や評論、古典など自分の外にあるものごと、さらにはそれらに対する他者の意見の受信が必要だ。他者の考えを受信するときどのような力が自分に働くかを感じ取り、受信したものを一旦壊してみても再構築することで、「自分」を見つけていく。そのため、「書く」「話す」だけでなく、「読む」「聞く」も同様に重視している。

取材・文／長島佳子



生徒一人ひとりと教員が 1対1で徹底的に向き合う

日本語科の授業では、単元ごとに自分の考えを文章化した作品を作ることをゴールとしている。そこに至るまでは、まず単元ごとに教材を深く読み込み、内容について議論したり仲間と対話することから始まる。そこから生まれた自分の考えを文章にして提出。最初は下書きで、先生から意見をもらい、ブラッシュアップしていく。

「『自分の言葉で自分を語る』とは、思い込みで書くのではなく、他者に伝わり、心に響く言葉になっているかが重要です」(山口先生)

「この表現で本当に自分の言いたいことが語れているのか」「この主述はずれていないか」「この視点は面白い」など、検討すべき点と良い点の双方について先生と個々の生徒の1対1のやりとりで行われている。手間はかかるが、先生と一緒に生徒がじっくり自身と向き合うことで、最初は自分の意見をうまく外に出せなかったり、文章化できなかったりした生徒たちが、自信をもって自分を表現できるようになっていく。

最終的に完成した文章はクラスごとに作品集として冊子化し、全員で共有。ほかの生徒の考えやまとめ方から刺激を受け、「次は自分もこのように書けるようになりたい」という原動力になる。

世の中に迎合せず たくましく個性を発揮する

単元ごとに作品集を作るサイクルを繰り返すことで、自分について考え表現する精度が高ま

自由の森学園中学校・高校の 自分について言語化するためのツール

【単元ごとの作品集】



単元ごとに自分の考えを文章にした作品を、クラスごとに冊子にまとめた作品集。表紙は生徒たちがイラストを描いて作成する場合もある。



原稿用紙にびっしりと綴られた生徒たちの文章。単元のテーマに対する自分の考え、そこから見出した自身の内なる思い、今後どう生きていきたいかなどが表現されている。

り、自己のあり方を生徒たちは見つけていく。こうした教育の結果、他者に心のありかを委ねず自立した個をもち、表現力が豊かな生徒たちが育っている。

「ただ、卒業した直後は、本校と世の中のギャップに生きづらさを感じている卒業生もいます。実際の世の中は、徹底的に向き合ってくれる大人が少なかったり、他者の流れに合わせれば良いという感覚の方が多いためです」(日本語科・土方真知先生)

しかし、前述のように読む力や受信力を磨いてきた卒業生たちは、世の中を読み込み、見極める力も身につけている。

「卒業して2年目くらいになると前向きに諦めるようです。与えられた環境のなかで、世の中の流れにのるのではなく、そこで自分に何ができるかを考えて行動していく。自然にたくましく成長していく卒業生が多いですね」(土方先生)

生徒の変化とともに 教員にも変化が必要

先生たちが近年課題と感じているのは、文章を添削されると自分を否定されていると感じる生徒や、教員受けするような答えを出そうとする生徒が増加傾向にあることだ。こうした生徒たちに、可能性を閉じさせず、自分と向き合うことの意味を伝える方法を模索するために、授業や生徒への向き合い方も変わってきたという。

「教育目標は同じでも、昔は個々の教員がストイ

ックに独自の授業スタイルを貫いていることが多かったです。今は若手もベテランも共に教科横断で、教員チームとして取り組んでいます。チームならお互いのノウハウを生かすことができ、若手から学ぶことも多いです。あらゆる人から学ぼうとする姿勢や、いろいろな方法を試そうとする若手のフレキシブルさには圧倒されます。その柔軟な対応力が、厚い生徒の殻を、無理矢理ではなく破っていけているように感じます」(山口先生)

同校の点数序列に迎合しない教育について「自由の森学園だからできる」と他校から言われることも多い。

「本校の取組がすべてとは思っていません。他校の先生たちともっと交流して、生徒が自分のあり方を見つけられる教育について一緒に学び合えたらいいですね」(土方先生)

日本語科の学習サイクル

次の単元へ

作品集が完成すると次の単元へ。このサイクルを全単元で繰り返していく。



単元について

単元は説明文や古文など通常の国語科に含まれる内容を網羅しつつ、文学作品の授業を重視している。



クラスで議論

単元の教材本文を読み込み、クラスで議論したり、仲間と対話したりすることで、内容への理解を深める。



自分の考えを文章化

教材の内容を理解したうえで、そこから自分が感じたこと、考えたことについて文章で表現していく。



友達の作品を読む

完成した文章を作品集としてクラスでまとめた段階で、仲間の作品について寸評を書き合う。人の作品からの刺激が成長の原動力となる。



ブラッシュアップして完成

納得のいく文章になるまで自分と向き合い、先生とのやりとりを繰り返し、文章を完成。クラスで作品集を作る。



先生に意見をもらう

書いた文章について、語り切れていないこと、独特な視点で書けていることなど、一人ひとり個別に先生から意見をもらう。

探究で 「私の言葉」を 探す

学校設定科目「探究基礎」で、 言語化を通して自分を見つける

うねび
畝傍高校（奈良・県立）

学校データ | 1896年創立／全日制課程普通科。昨年度に研究開発学校の指定を受け、独自の方法で探究に取り組んでいる。創立127周年を迎え、学校本館が登録有形文化財に指定される歴史ある学校。

研究開発学校の取組として 「探究基礎」を設置

畝傍高校は2014年度からはSGH、2019年度からは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、早くから課題研究に取り組んできた。2022年度には研究開発学校の指定を受け、独自の探究学習をさらに推進すべく、学校設定科目「探究基礎」を設置。今年度の1年生から実施が始まった。

「探究基礎を設置したのは、従来行ってきた課題研究や理数探究のためというより、全教科を

通じた“学び方”や“学びの作法”を身につけ、生徒たちが“学ぶ意義”に気づくためです。常識を疑い、新しい価値を見出す力がすべての学びに必要なことを、生徒たちに理解してほしいと考えています」(教育企画部・杉本和歌子先生)

探究の授業設計に携わった杉本先生は、情報過多の時代に、まわりに流されやすい生徒た



写真左から、教務部・中辻和宏先生、教育企画部・杉本和歌子先生

図1 探究基礎の1学期の内訳(10週・30時間)

分類	時間	担当教員	学ぶ内容
探究週	1時間	探究手法+情報	導入、1年間の見通し、気づきノートの書き方
探究週	2時間	探究手法+情報または英語/ALT	『ミニ探究』(チョコレートプロジェクト)前半
通常週	4時間	情報	『ミニ探究』の内容に関連づけて、情報収集および整理(メディア、個人情報、知的財産)
通常週	2時間	英語/ALT	『ミニ探究』の内容に関連づけて、英語で問いを立てる練習
探究週	3時間	探究手法+情報または英語/ALT	『ミニ探究』後半
通常週	10時間	情報	『ミニ探究』の内容に関連づけて、デジタル情報の扱い方
通常週	5時間	英語/ALT	『ミニ探究』の内容に関連づけて、英語で書かれた文献に当たる、ディスカッション
探究週	3時間	探究手法+情報または英語/ALT	『ミニ探究』まとめ

ちの姿に課題を感じていた。

「生徒たちはたくさんのことを大人から問われて、大人の期待に応えることが勉強だと思ってきました。そうではなく、世の中のものごとの、自分が関心のあることに自ら問いを立ててみる。それが、学びの本質だと知ってほしいのです」(杉本先生)

「進路指導でも、やりたいことを尋ねると『親はこう言っている』と答える生徒も少なくありませんでした。塾に行くのも親の指示や友達がみんな行くから。自分の意志が希薄なことが気になっていました」(教務部・中辻和宏先生)

周囲に流されず、誰かの描いた枠の中ではなく、自らの動機で挑戦できるような生徒の育成を目指し、探究の流れを設計していった。2年生の課題研究はグループではなく個人探究としている。一人ひとりの生徒が自分の動機と関心に基づいた、真に関心のあるテーマで自分探しをしてほしいからだ。

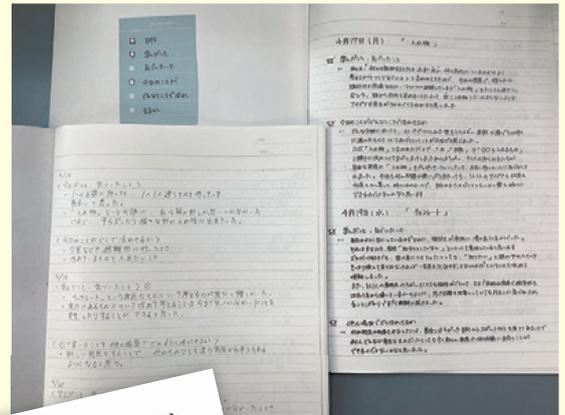
自由に柔軟な発想ができる 環境や仕掛けを授業に盛り込む

探究基礎は1年生の学校設定科目として、「情報I」とそれまでの学校設定科目「グローバル英語」の時間、合計3単位を割り当て構成される。1クラスに情報科から1名、英語科とALTが各2名、探究手法を担当する教員1名の計6名の教員がつく。探究手法担当は全教科の先生が含まれており、学年を問わず探究基礎の担当者として関わっている。時間割は探究週と通常週に分け、相互が有機的に結びつくよう

畝傍高校の自分について 言語化するためのツール

【気づきノート】

探究基礎の授業で毎回記入するノート。その日の実践と気づきだけでなく、それらを過去の経験などと結びつけたり、自分の考えが変わったりしたことがびっしりと書かれている。



【I am シート】

昨年度の1年生が使用していた「I amシート」。自分を見つめ直し自分について深く知るために、自分にどんな特性(好き・嫌いや得手・不得手など)があるのかを考えまとめる。

[ダウンロード可](#)

先生方に工夫してもらっている(図1)。

「英語を探究基礎に組み入れたのは、文化背景の異なるALT相手に『自分の伝えたい』ことが『伝わらない』という環境を経験させたいからです。聞き手の概念にないことを、聞き手の『なぜ』といった問いに答えながら説明する力は、どの場面においても生かせる力だと考えています」(中辻先生)

「特にALTの先生はクリエイティブな方が多く、ご自身の経験から良質な問いを立てるなど、もともと探究的な授業をされていたので探究基礎にも関わっていただきました」(杉本先生)



探究手法では知識だけでなく、面白い問いを
発想できるように、頭を柔らかくする授業の仕
掛けを含ませている。

例えば1学期の最初は「自分が入れ物だと思
う物」を新聞紙で作る授業から始まった。生徒た
ちは思い思いの入れ物を作り、入れる物やその
形にした理由などを自分の言葉で説明。自分と
仲間の発想や観点の違いに気づきを得ていた。

また、ミニ探究ではチョコレートをテーマに、問
いを段階的に深めていく。最初は「チョコレートを
使って疑問文を作ろう」とだけ伝えたと、すぐ
に答えが出る問いを出してくる。しかし、次の時
間から「面白い問いを作ろう」と負荷をかけると、
生徒たちは、面白い問いを立てるために自分に
足りないものを考え始める。対象に関する関心
や情報がないと自分の中に問いが生まれてこ

ないことに気づいていく。

授業に仕掛けを含ませる一方で、教員の顔
色をうかがわずに生徒が本音を出せるように、
教員は教壇に立たず、声かけも最低限にしてい
るといふ。

主語を付け、単語をつなぎ 自身の内発的な動機を知る

自分の考えや学んだことの言語化のために、
探究基礎では「気づきノート」を導入。その日の
実践、学びや気づき、次に挑戦したいことなど
を自由に記述する。

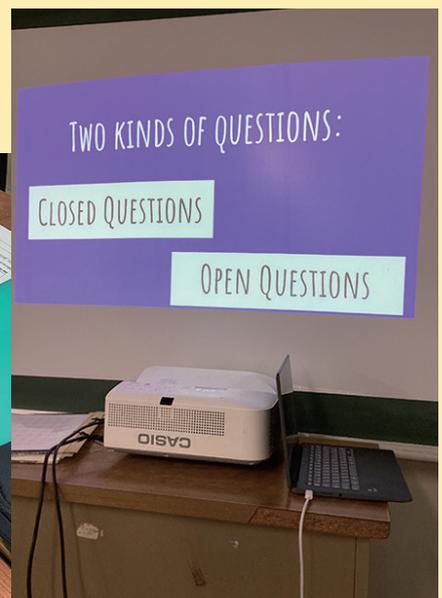
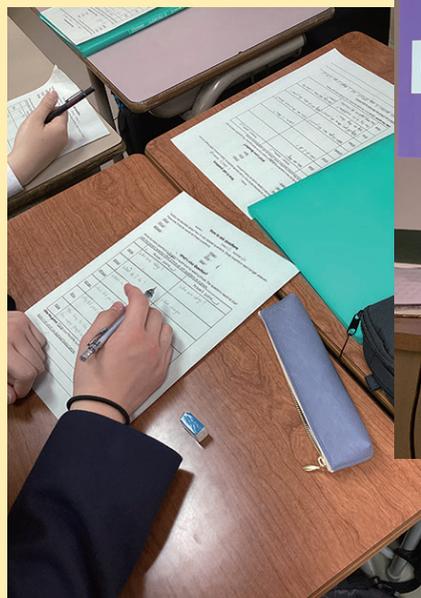
探究基礎が始まる前の昨年度の1年生は、
LHRで「I am シート」というツールを使用。「自
分とは何か?」と向き合うために、自分の長所・
短所、好き・嫌いを言語化して自分の特性に気

探究基礎での活動例



「自分が入れ物だと思う物」を作る授業では、折り紙のようにして
箱形にする生徒、平らなまま封筒を作る生徒、何もせず1枚の紙
のまま風呂敷のように使うと答えた生徒など、先生たちの想像を超
えた発想ができた。

探究基礎の英語分野で、問いの種類について学ん
だ授業。答えがYesかNoなど、一つしか答えがない
"Closed Questions"と、複数の答えが存在する
"Open Questions"について英語で学んだ。



ペアワークの授業では、「あるもの」を相手に言葉だ
けで説明して推測してもらうワークなどを行っている。説
明する際に使用NGの単語が設定されているため、
生徒たちは描写に思考を凝らしながら奮闘していた。

づき、仲間と伝え合うことで、さらに自分について深く知っていく。今年度も同様の取組をする予定だ。

そのほかにもさまざまなワークシートで考えを文章化する機会を設けているが、生徒が自分の真の興味関心と向き合うために同校が意識しているのが「主語」だ。生徒たちが、テーマ設定の理由を述べたり書いたりするときに、通常「主語」は書かない。例えば、ある対象について「課題意識をもっている」と言えば、本人以外にも伝わるからだ。教員は、生徒たちが研究を進めるなかで、本当の意味で「自分ごと」に引き寄せるために、「課題意識をもっているのは誰？」など、「私」という主語を言わなくてはならないような、小さな仕掛けをするなどしている。

一方で、自らの内発的な興味から課題研究ができている生徒たちは、テーマ設定の際に、その理由をしっかり言語化することができつつ

あった。さらに自分ごとにできるよう、動機や経験などを入れるように促している。そうすることで自分の物語が動き出すと考えているのだ。

生徒たちが面白いと感じる 発見ができるように

同校の探究基礎は始まったばかりだ。杉本先生は授業を通してあえて「課題解決」という言葉を使っていない。生徒たちが大人に聞こえのいいことではなく、自分が心から面白いと思える「課題発見」ができればいいと考えている。探究基礎では生徒たちは授業を楽しみながら自分の考えをもてるようになりつつあるが、あらゆる場面で意識できるようになってほしいと願っている。

「自分の考えについて単語をつなぐことで文章化する力を、進路選択にもつなげられるのが理想です」(中辻先生)

